

「鎌倉幕府と宇都宮城」

幕府の創設と宇都宮氏

記録上ははっきりと存在を確認できる宇都宮城の城主は、三代城主とされるうつのみやともつな宇都宮朝綱です。

朝綱は、平安時代の末頃には京都でごしらかわほうおう後白河法皇に仕えていました。(法皇とは、天皇が引退し仏門に入った場合の称号です。)当時、京都では、たいらのきよもり平清盛やその息子・むねもり宗盛をはじめとするへいし平氏が権力を握っていましたが、いずのくに伊豆国(静岡県の一部)に流されていたみなもとのよりとも源頼朝が挙兵すると、朝綱は平氏によって身柄を拘束されました。のちに脱出して(釈放されたという記録もありますが)頼朝に仕え、かまくらばくふ鎌倉幕府の創設に貢献して、宇都宮氏の勢力を大きく伸ばすことになります。

朝綱自身は、いち たに やしま だんのうら一の谷・屋島・壇ノ浦といった平氏との戦いに、直接は参加していなかったようですが、平氏を滅ぼした頼朝が、当時東北地方を支配していたおうしゅうふじわらし奥州藤原氏を攻めた際には参加しています。(つづく)

「鎌倉幕府と宇都宮城」

宇都宮に立ち寄った頼朝

平氏亡き後、源頼朝みなもとのよりともに従わない最大の勢力は、平泉ひらいずみ（岩手県平泉町）を本拠として東北地方全域を支配していた奥州藤原氏おうしゅうふじわらです。当時、頼朝の弟・義経よしつねが頼朝と対立して逃亡し、藤原氏にかくまわれていたため、それを理由に文治5（1189）年7月19日に奥州を攻めるため鎌倉を出発しました。宇都宮朝綱ぶんじとその子業綱なりつなは鎌倉から頼朝に従っています。

頼朝は、7月25日には現在の宇都宮市下河原町付近にあった「古多橋こたはしのうまや駅」という宿場に到着。二荒山神社に参拝して戦勝を祈願し、奥州を平定できたときは二荒山神社に捕虜を献上することを約束しています。

その夜、頼朝が熊谷直家くまがいなおいえを「本朝無双の勇士」とほめたことに対し、小山おやま政光まさみつが「直家程度の武士は、家来が少ないので自分で戦わねばならない。だから華々しい戦功があるのだ。自分は数多くの家来を戦わせることで貢献しているのだ。」と述べる場面がありますが、その席には朝綱の孫・宇都宮頼綱よりつながいたことが記録に残っています。（つづく）

「鎌倉幕府と宇都宮城」

頼朝の御宿

奥州に向かう途中の頼朝は、二荒山神社に参拝後、どこに泊まったのでしょうか。

鎌倉幕府の公式記録『吾妻鑑』^{あづまかがみ}には、頼朝が「古多橋駅」^{こたはしのうまや}に到着後、「宇津宮（二荒山神社のこと）」^{うつのみや}に参拝し、その後「御宿」に入ったと書いてあります。前回の小山政光^{おやままさみつ}にまつわる出来事は、その「御宿」でのことなのですが、「御宿」とはどこなのでしょう。

『吾妻鑑』の文面からは、頼朝の宿舎は古多橋にあったようにも読み取れます。古多橋は現在の下河原町付近だと考えられています。そこで、頼朝が泊まった宿所は、現在の下河原町付近と考えることもできます。

また、宇都宮城跡（現・宇都宮城址公園）の発掘調査で、鎌倉時代初期頃のものと思われる、多数の「かわらけ」という素焼きの土器が大量に出土しました。「かわらけ」は当時、正式な饗応の際に用いられた食器で、これが大量に出土するのは示唆に富んでいます。頼朝は宇都宮城内に宿泊したとも想像できますが、出土した「かわらけ」がそのときに使われたという直接の証拠はありません。

いずれにしても、二荒山神社から程遠くない場所に頼朝の宿舎はあったのでしょうか。（つづく）

「鎌倉幕府と宇都宮城」

奥州攻めに参加した宇都宮一族

頼朝よりともは文治5（1189）年7月26日に宇都宮を出発し、奥州おうしゅうへ向かいました。

奥州藤原氏ふじわらとの大規模な戦いは、阿津賀志山防塁あつかしやまぼるい（福島県国見町くにみ）で行われました。藤原氏は北上してくる頼朝軍を防ぐために、福島盆地の北部に、延長4kmもある堀と土塁を築き、当主・藤原泰衡やすひらの兄である国衡くにひらが守っていました。

頼朝軍は8月7日に防塁の前面に到着、10日に総力を挙げて防塁に攻めかかりました。『吾妻鑑』あづまかがみには、「武威をふるい、命を捨てることもかえりみず、戦いの声は山谷にとどろいた。」と記されていますが、なかなか突破することはできませんでした。

宇都宮朝綱うつのみやともつなは益子正重ましこまさしげ、芳賀高親はがたかちかとともに、土湯つちゆ（福島市土湯温泉）から会津方面へ迂回し、さらに山越えして防塁の背後に回りこんで攻撃したため、藤原氏は混乱して敗走しました。

その後は大きな戦闘もなく頼朝は平泉ひらいずみを占領し、泰衡は家来に裏切られて殺され、百年にわたって東北地方を支配してきた藤原氏は滅びました。（つづく）

「鎌倉幕府と宇都宮城」

樋爪氏の墓にまつわる話

現在、田川にかかると幸橋のたもと（現・大通り5丁目、昔は上河原）に宇都宮市指定史跡「樋爪氏の墓」があります。この墓には次のような伝説があります。

「奥州藤原氏滅亡のとき、藤原氏の一族である樋爪季衡・経衡は捕虜となり、二荒山神社に奴隷として引き渡された。季衡は故郷恋しさのあまり逃亡したが、田川のほとりの上河原で追いつかれて殺され、首は上河原に、胴は田川の対岸の今泉に葬られた。」というたいへん悲惨なお話です。

ところが当時の公式記録では、「樋爪俊衡と弟の季衡が降伏したが、頼朝は俊衡の老齢に免じて罪を問わず、領地（陸奥国比爪、現・岩手県紫波町日詰）もそのままにしてやった。頼朝は奥州からの帰途、戦勝のお礼のため二荒山神社に参拝した際、季衡を二荒山神社の神職の一人として奉仕させることとした。」というものです。

季衡に対する処置は一種の流罪であって、敗者に対する懲罰であったことは間違いのないとしても、伝説よりはるかに優しいお話です。

季衡が許されて故郷に帰ったという記録はないので、季衡は宇都宮で亡くなったものと思われます。望郷の念を抱いて亡くなったであろう季衡を哀れむ宇都宮の人々の心が、悲劇的な伝説を生み出したのかもしれませんが。（つづく）

「鎌倉幕府と宇都宮城」

奥州攻めの恩賞

ぶんじ ぶんじ
文治5（1189）年平泉に入った源頼朝は、功績のあった武士たちに
論功行賞うつのみやともつなを行っています。宇都宮朝綱みなもとのよりともに関しては記録がありませんが、
宇都宮氏の家臣・芳賀氏はがと益子氏ましこについては記録が残っています。
それによれば、「両者の功績はたいへんすばらしいものである。」としな
がらも「所領しよりょう（土地）をあたえるには及ばない。」として旗二本を与え
たということです。

頼朝など関東の武士たちを驚かせたのは、中尊寺ちゅうそんじや毛越寺もうつうじなどの大寺
院や藤原氏の巨大な居館きょかんなど、平泉の町とその文化でした。『吾妻鑑』あづまかがみに
は寺院や居館の様子が詳しく記されており、その驚きの大きさが察せら
れます。それがその後の鎌倉の町づくりに大きな影響を与えたとともに、
朝綱の目を通じて宇都宮の町づくりにも影響したかもしれません。現存
する中尊寺金色堂こんじきどうや、発掘された柳之御所やなぎのごしょ（藤原氏の居館）の跡は、そ
の面影を今に伝えています。

頼朝は平泉からの帰途、再び宇都宮に立ち寄り、二荒山神社に参詣し
ています。これは、往路に実施した戦勝祈願のお礼のためで、勝利のお
礼としてしょうえん莊園一か所を寄付したということです。（つづく）

「鎌倉幕府と宇都宮城」

鎌倉時代における宇都宮城の役割

みなもとのよりと源頼朝おうしゅうの奥州攻めは、鎌倉幕府が権力を確立するためのものであったと同時に、宇都宮氏が幕府内での地位を高めるきっかけにもなりました。その動きのなかで宇都宮城は、宇都宮氏の拠点として、また奥州攻めの基地として重要な役割をはたしたものと思われます。

この時期の宇都宮城および宇都宮の町の様子についてははっきりと描かれた資料はありませんが、推定する手がかりはいくつかあります。

それは、文字で記された記録類、発掘調査の結果、現在も残る寺院や旧跡の所在場所、伝説や伝承、地形などが参考となります。

そこで、それらの手がかりをもとに、鎌倉時代の宇都宮城と宇都宮の町の様子を推定してみましょう。

まず、記録類ですが、そのひとつに、鎌倉時代に宇都宮氏が定めた『宇都宮こうあんしきじょう弘安式条』という法令があります。これは、宇都宮氏が領地を支配するために定めたものですが、この中に70か条にわたる詳細な規定があり、当時の宇都宮の様子を知ることができる貴重な資料となっています。

(つづく)

「鎌倉幕府と宇都宮城」

宇都宮弘安式条

『宇都宮弘安式条』は全部で 70 か条あります。内容はお寺や神社に関するもの、裁判に関するもの、鎌倉幕府との関係についてのもの、一族郎党の支配に関する事などさまざま、いずれの箇条も当時の宇都宮のようすを知ることができる興味深い内容です。

その中に、「当社・神宮寺・念仏堂・大湯屋」といった宗教関係のものらしい名称、「市・検断所」といった施設名と思われるもの、「宮中・不入許・宿河原・上河原・中河原・小田橋」といった地名らしいもの、「町屋」という一般庶民の居住する場所を指すと思われることば、「池」という自然地形をあらわすことばが出てきます。

このことから、宇都宮は、すでに鎌倉時代にはさまざまな役割を持つ人々が居住もしくは滞在し、それぞれに性格の違ったいくつかの地区があり、行政や商業の機能を持つ施設がみられる、「都市」としての形を整えていたことがわかります。

宗教施設のうち、「当社」は二荒山神社、「神宮寺」や「念仏堂」は二荒山神社の周辺にあった寺院、「大湯屋」は神事に際して身を清める場所と考えられます。また「宿河原・上河原・中河原・小田橋」は田川に沿った場所の地名でしょう。(つづく)

「鎌倉幕府と宇都宮城」

鎌倉時代の宇都宮

宇都宮弘安式条にみられる地名などを今の場所に当てはめてみると、中世の宇都宮の様子がわかります。

二荒山神社の場所は現在と変わりませんが、その周辺には多くのお寺がありました。現在の馬場通り・宮町・本町付近は、宗教的な場所であったことがわかります。それに対して現在の中央・本丸・旭付近は、宇都宮城が存在することからもわかるように、政治的な場所であったと思われる。宗教的な場所と政治的な場所は釜川が流れる谷をはさんで南北に向かい合っていたのです。また、田川に沿って東北地方への主要道路「奥大道」が通じており、現在の下河原・天神・三番町・大通り付近には街道を通行する人々が利用する宿がありました。そして一般の人々が居住する「町屋」は、奥大道と二荒山神社・宇都宮城に囲まれた、現在の大通り1～2丁目・一番町・二番町などを中心に存在していたものと思われる。

当時の宇都宮の町は、高台にある宗教的な場所と政治的な場所、低地にある奥大道と庶民の町とでかたちづくられていたのです。(つづく)

「鎌倉幕府と宇都宮城」

中世都市宇都宮

これまで見てきたように、平安時代後半から鎌倉時代にかけて、宇都宮と宇都宮城は、朝廷ちやうていや鎌倉幕府ばくふが東北地方を経営するうえで、また人々が関東地方と東北地方を往来するうえで、重要な役割を果たしてきました。

関東と東北の境界に近いという地理的な位置、奥大道おくおおみちという幹線交通路が通っていたこと、二荒山神社ふたあらかましんじやがあるという宗教的・精神的な要因、宇都宮城があり、その城主宇都宮氏が鎌倉幕府の有力者であったという政治的な影響力など、宇都宮が発展するさまざまな要素があったのです。

とくに、宇都宮城を中心とする政治的な町、二荒山神社を中心とする宗教的な町、奥大道を軸とする交通の拠点という、のちに「城下町」じょうかまち、「門前町」もんぜんまち、「宿場町」しゆくばまちとして長く続いていく宇都宮の三つの性格が、早くも鎌倉時代に原形がつくられていたことがわかります。

そのなかで宇都宮は、さまざまな役割を持つ人々や施設が数多く集まっているという、当時としてはまれな「都市」としての発達をとげたのです。(つづく)